

### (3) 海外山行を寸描する

14 の海外山行のそれぞれについて次の事項に写真数葉と行程～高度図を付して、寸描する。

#### 山行時年齢(年) 山名(標高 国名) 登頂か敗退か

山名の意味

山行の形態

登山口までの交通

～は空路、一は自動車路

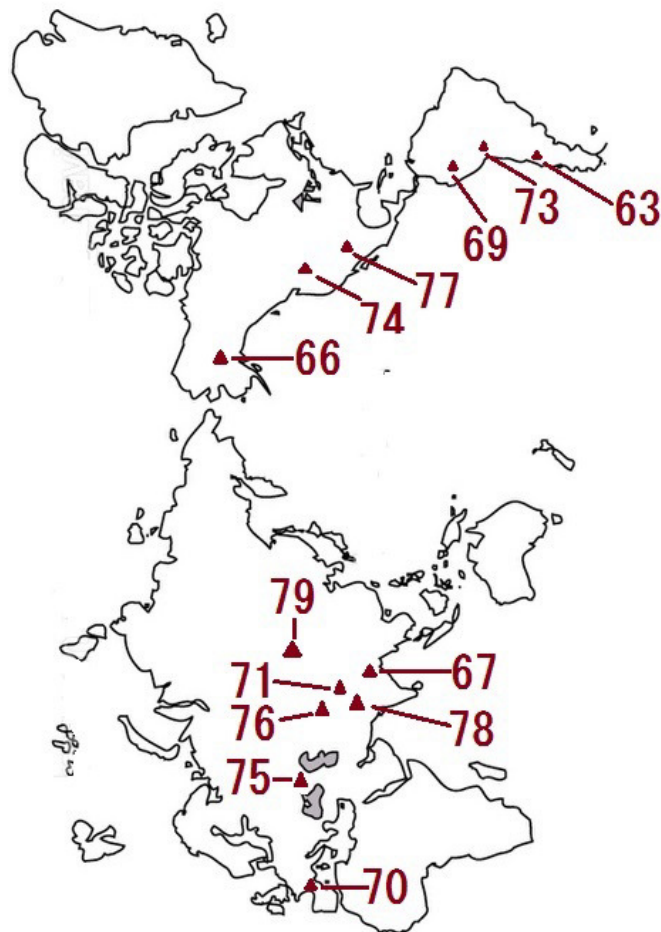
行程～高度図

横軸:入山から下山までの間の経過日数、縦軸:標高

高度は当該日の最高到達地点と宿泊地点を結んでいることから、水平は滞在、三角形は高標高に到達した後降りていることを表している

同図①、②、…の説明のなかの用語

BC:登山基地、ABC:前進 BC、C1、C2、…:露营地



数字は5(1)の表の年齢

## 63 歳(平成 14 年) アコンカグア(6962m アルゼンチン) 登頂

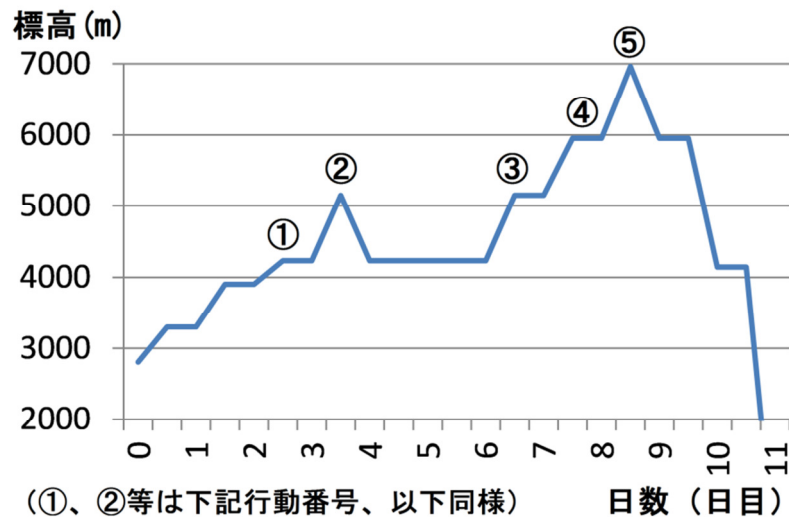
現地語で「岩の番人」

双耳峰の北峰

自己手配、単独行

成田～北米～ペルー・リマ～チリ・サンチャゴーアルゼンチン・メンドーサー登山口 Puente del Inka

サンチャゴ在住の若い知人にお世話になった



- 1 BC (4350m) に 3 日かけて高度順化しながら入る
- 2 C1 (5350m) に高度順化する
- 3 天候回復を待って C1 に入る
- 4 同じく C2 (5850m) に入る
- 5 登頂し、C2 に戻る (13 時間半)

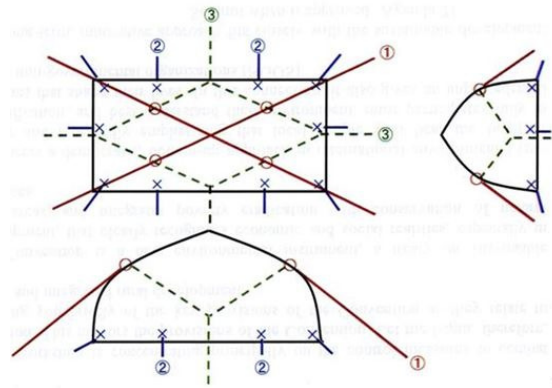
前年の敗退の経験から日程編成、装備、食糧に工夫したつもりであったが、装備に大きな失敗をした

入山日からダイヤモンドを服用した

C2 で水・湯つくりに支障をきたしたが、BC に戻り補強することなく前進し、頂上まで独りで雪を踏み、その日最初の登頂者となった

BC に戻り右足の中指が壊死しているのに気づき、帰国後虎の門病院で切除した

エスペース・ソロウインターをメーカーに図のように補強してもらい、補強したテントは強風によく耐えた。まだ現役である。



- ①張り綱を強化 4本
- ②八綱を新設 10本
- ③張り綱を新設 4組

装備に大きな失敗があった。

- ・アメリカ合衆国がコンロの通過を認めないので、サンチャゴでレンタルした。これが 2 台ともに不良品であった

C2 でかろうじてつくった水 4L で C3 に向かい、頂上を往復した

高所で 2 日間お湯無しはきわめて危険であり、壊死の原因の一つではないか

- ・この登山のために新調した登山靴も、以前から使っていた寝袋も日本の厳冬期にも耐えないものであることを、後年中島ガイドに指摘されて初めて分かった。これも壊死の原因ではないか



BC から西壁を望む



登頂後グランキャナレータを降り、グラントラヴァシアへ

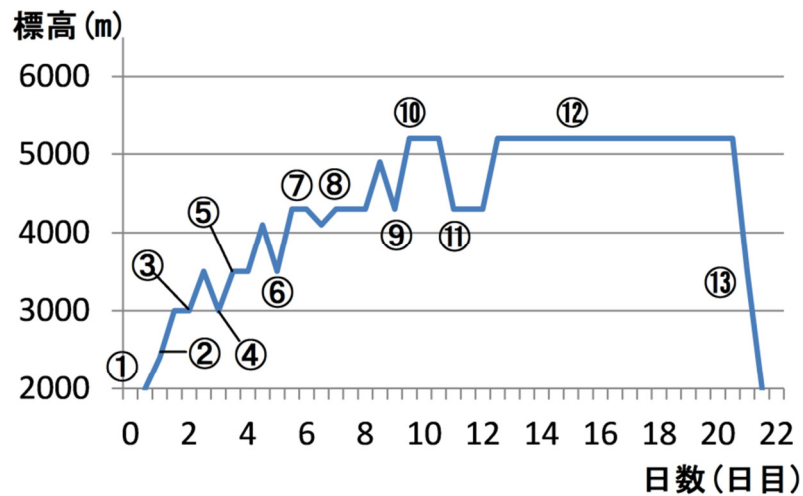
グラントラヴァシアを終わる

66歳(平成17年) デナリ(6194m アメリカ合衆国) 天気に恵まれず、5200mで敗退

先住民語で「偉大なもの」

国内公募隊

成田～シアトル～アンカレッジ～登山口タルキートナ



- 1 ランディング・ポイント(2200m)の氷河に軽飛行機で降りる
- 2 C1(2400m) Ski Hill に泊
- 3 C2(3000m) Upper Kalhitona Glacier に泊
- 4 C3(3400m) Motor Cycle に荷揚げし、戻る
- 5 C3 に泊
- 6 Windy Corner(4100m)に荷揚げし、C3に戻る
- 7 C4(4300m) Basin Camp に泊
- 8 Windy Cornerに荷を取りに行き、C4戻る
- 9 16Ridge(4900m)に荷揚げし、C4に戻る
- 10 16Ridgeの荷を持ち、C5(5200m) High Camp に入る
- 11 凍傷者とC4に戻る
- 12 再びC5に入り、登頂に備え天候回復を7日間待つ
- 13 天候回復せず、下山日に間に合うように徹夜で降りる

リーダー、サブリーダーの応援でダイヤモンドを服用しなかった

サブリーダーが凍傷者を連れ、C4から降りた

リーダーの誠意・根性に敬服した

通常は3日に1日は登頂日となるが、ずっと回復せず

他隊は順次降りていくなか、食糧・ガソリンを他隊から調達し、

天候回復を待つ。最終日の食糧は3人で750カロリー

排泄物はクレヴァースに落とすか、国立公園事務所から渡された樽を利用する等、衛生管理が徹底していた





ブッシュ・パイロットの氷河への巧みな着陸



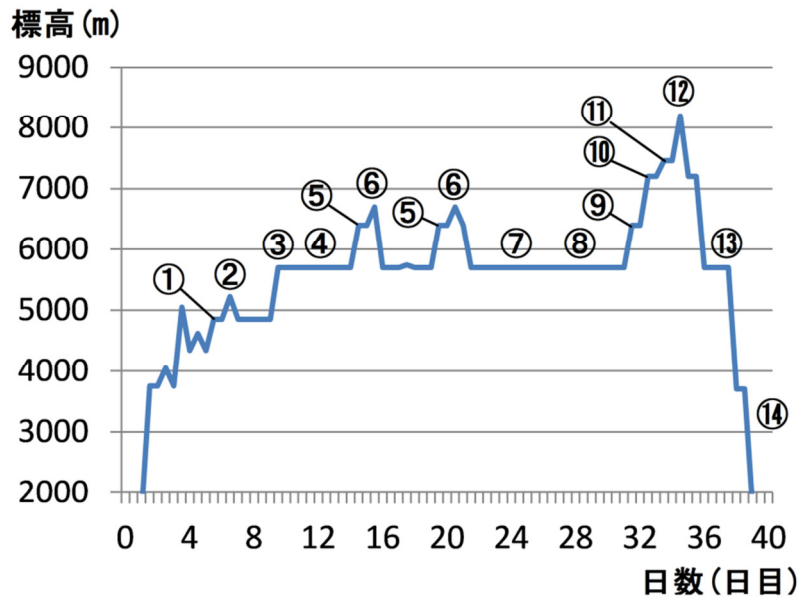
最終キャンプで7日天気を待つが・・・

## 67歳(平成18年) チョー・オユ(8201m 中国チベット) 登頂

シェルパ語で「トルコ石の女神」

成田～バンコック～ネパール・カトマンズーKodariーチベット・ZhangmuーNyalamーKingriーBC

国際公募隊 日本人グループは倉岡裕之・田村真司ガイドが率いる。



- 1 高度順化しながら BC(4855m)に入る
- 2 訓練
- 3 ABC(5900m)に入る
- 4 訓練
- 5 C1(6400m)に泊
- 6 6700mまで登り、ABCに戻る
- 7 休養
- 8 天気待ち
- 9 C1泊
- 10 C2(7200m)泊
- 11 C3(7450m)泊
- 12 登頂し、C2に戻る(9時間弱)
- 13 ABCに戻る
- 14 下山し、Zhangmuへ

荒天・積雪で雪崩の危険から、撤退となる

その夜強風が吹き、雪が飛び去り、登頂できることとなる

前日焼け酒を飲まず、日課のウォーキングを続けたのが通じたか？

登頂日は難所を越えた後シェルパと1対1に

100歩を歩く間に3度、ひと呼吸しながら頂上へ

頂上で40分間酸素マスクを外していたら、頭と手が思うように働かず、ハーネスを締ることができなくなった

高度順化は各高度とも同じくらいつらかった



チョー・オユ見ゆ



C1



C1 を発ち C2 へ



アイスフォールを通過し、C2 へ 倉岡裕之ガイド撮影



## 69歳(平成20年) ワスカラン(6768m ペルー) 登頂

双耳峰の高い方の南峰へ

1962年融雪時のなだれで死者3500人、1970年には地震に伴う地すべりにより死者約2万人

と自己手配

成田～トロント～ペルー・リマ～ワラス

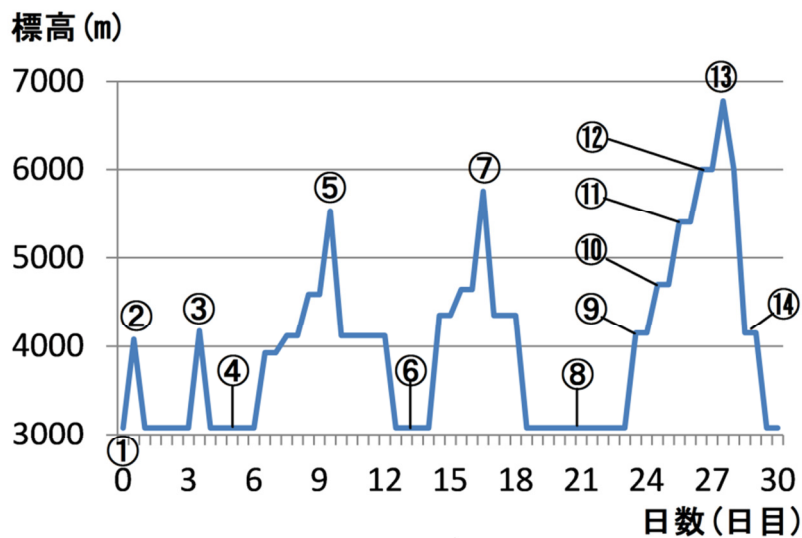
ワスカラン ガイドとポーターと

HP「今、山へ」を訪ねてきた、名古屋山岳会の名クライマー故加藤幸彦さん(カナダ在住)から、氏が初登頂記録をもつペルーへ誘われる

ワラスに滞在し、ブランカ山群の山をいくつか登る(大町に滞在し、北アルプス後立山連峰の山をいくつか登る感じである)

国際ガイド免許を持つ加藤さんがガイド会社に隊編成を依頼し、現地ガイド無しでイシンカ(5530m)、ピスコ(5752m)を登る

単独でガイド会社にガイド登山を依頼し、ガイド1、ポーター2(食事は他隊と共有)の編成で、ワスカランを登る



- 1 登山基地となる都市ワラス (3080m) へ公共交通で移動し、ガイド会社のホテルに長期泊
- 2 高度順化で Churup 湖 (4450m) へ
- 3 同じく Ahuac 湖 (4290m) へ
- 4 隊編成、食糧買い出し
- 5 イシンカ (5530m) 登頂 C1 (3925m)、C2 (通常 BC4350M)、C3 (4790m)
- 6 ワラスに戻り休養、隊編成、食糧買い出し
- 7 ピスコ (5752m) 登頂 BC (4600m)、C1 (4645m)



8 ワラスに戻り休養、ガイドにワスカランガイド登頂を依頼  
(ワスカラン登頂)

9 BC (4150m) 泊

10 C1 (4700m) 泊

11 C2(通常のBC 5400m) 泊

12 C3 (6000m) 泊

13 頂上を往復(6時間)し、C3 泊

14 BC 泊



C2からのワスカラン アイスフォールを早朝に通過する



やっとアイスフォールを通過し



強風のなかC3 (6000m) を設営



ワスカラン南峰頂上から

## 70 歳(平成 21 年) ピレネー(スペイン) 登頂

もともとスペインに関心があったうえに、アコンカグアで隣にテントを設営したスペイン・バスクの青年に誘われ、また帚木蓬生『白い夏の墓標』の舞台を見たかった等から、スペインを 1 ヶ月訪ね、その間にスペイン最高峰アネット(3404)を友人と一緒にガイド山行し、またモンテ・ペルディード(3352)と円形劇場を単独でトレッキングした



スペイン最高峰アネット(3404m) ガイド、友人と。喜寿、最初の山。

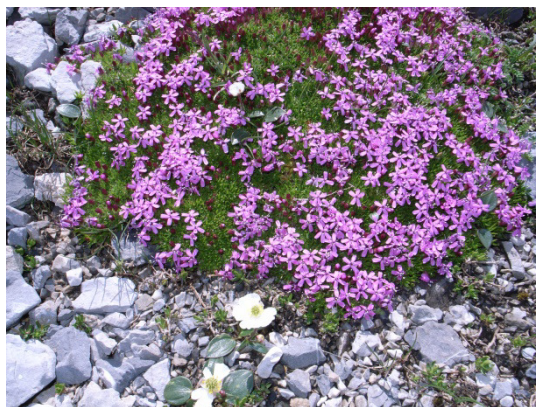


モンテ・ペルディード (3352m)

露営場所を尋ねると  
お花畑のどこにでもよいとのこと







円形劇場は上から見降ろしても下から見上げてても



[\(目次に戻る\)](#)

[\(次項に進む\)](#)